～Making of『野ばらハンドブック』～

千葉県立中央博物館
御　巫　由　紀

今年（2019年）６月に、『野ばらハンドブック』という小さな本を出しました。花卉研で取り組ませていただいた論文テーマがバラの花色素。それがきっかけとなって、以来ずっとバラを追いかけ続けています。

野ばらハンドブック表紙

特に興味を持ってきたのは日本の野生バラ。この本では日本各地に自生する「野ばら」についてまとめました。出版にこぎつけるまでのあれこれをご紹介させてください。

『野ばらハンドブック』のはじまり

文一総合出版の編集の椿康一さんが、「日本の野生バラの本を出しませんか？」と声をかけてくださったのは2006年のこと。バラ属の検索のキーとなる花や実、葉などの形態を写真で詳しく見せる本が作りたい、と妄想だけは広がりましたが、肝心の写真が用意できず、頓挫したまま月日が流れました。

2015年に別の出版社から、雑誌で「日本の野生バラ」という特集をするので協力を、と言われて原稿と写真を提供しました。しかし驚いたことに、一度も校正を見せてもらえないまま出版されて、合間に入れられた他の写真や文章には誤りが多く、残念な仕上がりにがっかりしていました。

そこへタイミングよく、椿さんから久しぶりの連絡。「誰かプロのカメラマンに写真を頼めたら、野生バラの本をハンドブックのシリーズでやってみる気はありませんか？」　リベンジしたい気持ちもあって、「やってみたいです。撮ってくれるカメラマンさん、いらっしゃるでしょうか？」「大作晃一さんだったらどうですか？」

大作さんは、私が就職したばかりの頃から千葉県立中央博物館できのこの写真と、それだけでなく標本整理もお世話になっている、図鑑業界で超人気のカメラマン。花の撮影にも取り組んでいて、構図の勉強のためにフラワーアレンジメントの教室にも通ったと聞いていました。「大作さんにお願いできたらほんとに嬉しいですけれど…」

こんな感じで『野ばらハンドブック』の企画は始まりました。椿さんは「今までにない美しくて使えるバラ図鑑を」と早速、ページ割とページ見本を作ってくれました。でもじつをいうと、長年寝かせていた間に、私の頭の中にはおぼろげながらレイアウトのイメージができていました。

2015年11月に千葉県の佐倉草ぶえの丘バラ園を３人で訪ね、植栽されているバラの撮影を依頼するとともに、赤く熟した実を試し撮り。冬の間にいろいろ考えて2016年春から本格的に撮影を開始し、１年間で撮った写真を組み合わせて2017年３月に、テリハノイバラのページ見本を作ってみました。

ページ割では、日本のバラ属野生種16種類と自然交雑種、それに江戸時代以前に日本で栽培されていた園芸品種を104頁で解説することになっていました。１種類につき４頁、話題が多い種類は６頁。ふつう図鑑は１頁に数種類の植物が入るものなのに、１種類につき4～6頁とは贅沢です。お言葉に甘えて、というかちょっと甘え過ぎですが、１種類６頁でページ見本を作りました。１頁めは開花枝と分布図、２～４頁はそれぞれ花、葉、実の写真（断面や拡大写真等も）、５頁めは春と秋の生態写真、６頁めは特徴の箇条書きとコラム。これをもとに組み立て直した結果、全部で152頁になってしまいました。

ページレイアウトはもちろん素人ですからきっとさまざま直されるだろうな、と覚悟していましたが、な

テリハノイバラのページ

んと、私の希望をほとんどそのまま通していただけました。種ごとに写真を指定して大まかなレイアウトを作ると、デザイナーの方がそれを最大限に活かしてどんどんページを作っていってくださいました。

撮影の日々

2016年の４月下旬から2019年４月上旬までの３年間、計60日以上かけて撮影をしました。生態写真は各地に出かけて撮影しましたが、その他のほとんどすべてを佐倉草ぶえの丘バラ園で撮影しました。一部、どうしても困ったときは、京成バラ園、バラの家、大阪府営浜寺公園、国営越後丘陵公園にご協力いただきました。仕事の都合で私が行けず、大作さんが単独で撮影してくれたこともかなりありました。

『野ばらハンドブック』と並行して、オールドローズ100品種を紹介する『魅惑のオールドローズ図鑑』（世界文化社，2018年）も作っていましたので、撮るべき写真は数知れず。特別に朝早くバラ園に入れていただき、夕方５時の閉園時間まで撮影を続け、それでも終わらなかったもの、たとえば葉や実など少し時間をおいても撮影できるものは、印旛沼のほとりの公園で夕日を眺めながらもうひと頑張り。

私は一日中バラ園を歩きまわって、「これこそこのバラの典型的なひと枝！」と言える枝を探しました。かつてこれほど真剣にバラの細部をみつめたことはありませんでした。大作さんは次から次へと私が運び込むバラに、最高のポーズを決めさせて、恐ろしい集中力で撮影していきます。ただ普通に撮影するわけではなく、ピントをずらしながら何度も撮影します。複数の画像を合成することで、隅々までピントのあった深度合成写真ができあがります。画像の合成はパソコンで行うので、その場で完成写真を見ることはできません。

撮影を始めて最初に私の手元に届いたのは、まるでこちらに微笑みかけてくるような、あでやかなオオタカネバラの写真でした。息をのむような美しさで、パソコンの画面に釘付けになりました。こんな写真をこれからたくさん見ることができるなんて、それだけで夢のようだと思いました。

（１）バラ園の朝

大作さんの撮影スタジオは車の中です。大きなバンの後部座席を取り除き、撮影台と作業台（あるときは調理台に変わる）が備え付けられています。遅くとも朝７時には草ぶえの丘に着き、まずバラ園をひと巡りしてその日の撮影の優先順位を検討。いちばん急いで撮らなくてはならないのは、一重咲きで花弁が薄い野生バラの花です。気温が上がるとハナアブやハチの仲間が花を訪れ、花粉を食い散らかして、花弁を傷つけてしまいます。

（２）花とつぼみの撮影

最初に開花枝の全体像を撮影し、次に花を正面と真横から撮影。そして花の断面を見せるため、縦半分に剃刀の刃で切断。これが極めて難しく、結局私は最後までその技を習得できませんでした。幸い、大作さんはとても手先が器用で助かりました。断面を作るときの注意点は以下の通り：

・花柱の毛の有無がノイバラ節では重要なキーになるので、花柱表面は傷つけない
・花柱の基部で刃を少しだけ奥に寄せ、花盤の中心線を通るようにする
・花弁、萼片、萼筒の順に切っていくが、花弁が散らないように気をつける
・萼筒の中の子房や、そのまわりの毛がなるべく動か

ないようにそっと切る
・毛などが散らばってしまったら、実体顕微鏡で見てピンセットで整える
・萼筒の最下部で刃をわずかに手前に戻し、小花柄の表面を傷つけないようにする

花の撮影が終わったら、続いてつぼみの撮影。花弁がちらりと覗くくらいのつぼみを選び、真横からと断面を撮影します。咲いた花を切るのも難しいですが、つぼみを切るのは至難の技。ぴったり中心線ではなく、ほんのわずかに真ん中を避け、花柱を傷つけないように切らなくてはなりません。

つぼみと花の断面作成風景

（３）バラ園の昼下がり

昼下がりというより、暑い日には５月でも10時過ぎくらいから、日が高く昇ると野生種の花はあきらめて、葉や刺の撮影をしました。基本的に葉は、全体の裏表と托葉を撮りましたが、種類ごとにいろいろ違う撮影ポイントがありました。たとえばハマナスとカラフトイバラは葉の裏の腺点、カカヤンバラは鋸歯先端の腺点が特徴なので、それぞれ拡大図が必要でした。ヤブイバラの葉裏の主脈上にある伏毛も、サンショウバラの葉の軟毛も忘れてはいけませんし、バラは枝の刺のようすが春と秋で変わりますので、その違いがわかる写真も撮りました。何か忘れているのではないかとはらはらしながら、大きな一覧表を埋めていく作業が続きました。

（４）実の撮影

秋には実の撮影。花と違って撮れる期間は長いかと思っていましたが、実際には熟しすぎると切ったときにグズグズになってしまいます。果皮が赤くなっていなければもちろんダメですから、ちょうどよいタイミングをつかむのは意外と難しく、全部の種類を撮るにはそれなりに時間がかかりました。

（５）雌しべの撮影

１年めの撮影を終えたとき、ノイバラ節の雌しべの違いは花やつぼみの断面写真では見づらいので、雌しべだけの写真が必要だと気づきました。花弁と雄しべをむしり取って黒バックで撮影するのがいいと判断し、２年めからは雌しべ写真も撮影メニューに加わりました。それほど萎れる心配はないですし、花弁と雄しべをむしるくらいなら私でもできます。日が暮れて一日の最後は、LEDランプで照らした実体顕微鏡の下で、ピンセットで雄しべを取り除き、雌しべを整えて撮影、ということが多くなりました。

思いもよらないできごとの数々

撮影を続けていると、たくさんの発見がありました。なかには、どうしてこんなことに今まで気づかなかったのだろう、ということもありました。全部はとても書ききれませんので、特に驚いた例を３つだけ。

（１）サンショウバラの実の断面

サンショウバラの実は表面が硬い刺で覆われているのが印象的ですが、果肉が厚いのも特徴です。その果肉が困ったことに酸化しやすく、剃刀で切るとすぐに黒ずんでしまいます。これはもうどうしようもないかと思われましたが、大作さんがステンレス製の剃刀というものをみつけてきてくれて、難問解決。きれいな断面の写真を載せることができました。

（２）ノイバラの刺

2017年３月に種ごとのページ見本を作っていたら、なぜかノイバラの刺の写真がないことに気づきました。大作さんが撮り忘れるはずはないのに、と不思議に思いながら迎えた２年めのシーズン。佐倉草ぶえの丘バラ園でノイバラが咲き始め、いい枝を探そうと近づいてびっくり、刺がありません。園内にはノイバラが何株か離れた場所にあるので全部確かめましたが、どれもみな刺無し。台木用に選抜された刺無し品種のノイバラだけが、植栽されていたのでした。もう何年も通っているのに、刺がないことに気づいていなかったことが衝撃でした。

やむなく印旛沼のほとりや用水路の岸を歩いて正しいノイバラ探し。しかしまた驚いたことに、おそらく園芸品種のバラの花粉による遺伝子汚染の結果でしょうが、「花柱がひとつに合着する」というノイバラ本来の特徴が失われ、ほぐれた筆の先のようにバラバラに分かれている株が多く、理想のノイバラを探してか

なりの時間、水辺をさまようことになってしまいました。

（３）カカヤンバラの冬芽

この本では、すべての野生種についてレイアウトを統一し、頁をめくれば花なら花、托葉なら托葉を見比べられるようにしました。しかし困ったのがカカヤンバラの冬芽の撮影です。ふつうのバラは早ければ11月下旬には冬芽を作り始めるのに、カカヤンバラは年末になっても柔らかい芽を伸ばし続けていて、冬芽を作る気配がありません。日本では石垣島だけに自生する亜熱帯性気候に適応した野生バラですので、休眠する習性がないのだろうか、と危ぶみました。最初の２年は撮影できず、もうダメかとあきらめかけた2019年の１月下旬、とうとうカカヤンバラの冬芽をみつけました。関東では寒い年の厳冬期にほんの一瞬だけ、冬芽を作るのかもしれません。

完成まで

（１）タイトル

2017年の年末に、販売促進用のポストカードを作るということになりました。まだ本体が影も形も無いのにすごい！ と思いましたが、そのときにひとまずタイトルだけ、決心することになりました。『バラハンドブック』、『日本の野生バラハンドブック』、『のばらずかん』などが浮かびましたが、博物館の司書とも相談して『野ばらハンドブック』となりました。出版後に「野ばら」は漢字と平仮名が「草ぶえ」と同じパターンですね、と言ってくれた方がありましたが、それは気づいていませんでした。

タカネバラのつぼみとその断面

（２）表紙デザイン

初め私が希望していたのは、黒バックで花の正面写真を並べるデザインでしたが、上品な雰囲気にしたいという椿さんの意見もあって、白バックでタカネバラの花の枝を表紙に、実の枝を裏表紙に、扉にはタカネバラのつぼみの断面写真を入れることになりました。タカネバラの学名は *Rosa nipponensis* ですし、飽きのこないデザインで正解だったと思います。

（３）コラム等の執筆

もともと私が日本の野生バラに興味を持つようになったのは、院生として花卉研に入り、花色素の分析材料として出会った野生バラについて、調べたくてもいい参考文献が少なく、教えてくれる人もいない実情を知ったからでした。バラについて語るとき、誰もが「現代バラの育種には、日本の野生バラが大きな役割を果たした」と言うわりには、いつ、どこへ行ったらどの野生バラが咲いているのか、調べるすべがありませんでした。

そこで、就職して学位も取れてさあこれからは好きなことを研究できる、という環境になったとき、何はともあれ自分自身の目で、野生バラの自生地を見て歩きたいと思いました。頼りにしたのは国立科学博物館や東京大学など、大きな標本庫に収蔵されている植物標本でした。

そうやってある程度、日本各地の野生バラについて見聞きしてきましたので、書きたいことは山ほどありました。どのくらいまでマニアックなことを入れるか、その判断には苦しみました。また、わかっていたつもりのことでも細かく裏付けを取ろうとすると意外に手間取ったり、海外の人名や地名のカタカナ表記に悩んだりして、執筆にも思いのほか時間がかかってしまいました。

（４）英語対応

ハンドブックの企画当初から頭を悩ませていたのは、どのくらい英語を入れられるか、ということでした。海外のバラ関係者はきっと関心を持ってくれると思ったのですが、種ごとの図鑑ページはスペースが限られていて、英語併記は絶対無理です。本の最初に総説のようにして書いた、「世界の野ばら、日本の野ばら」という部分だけでも英訳を入れさせていただけないかと椿さんにお願いし、いったんOKとなって英文を作りました。ところが最後の段階で、やはりほかのハンドブックとの兼ね合いもあり英文ページを入れるのは難

しい、という会社の判断。しかし、代わりに海外読者用の折込みとして別に印刷してくださるということになり、ほんとうにありがたく思いました。

（５）あと一息！

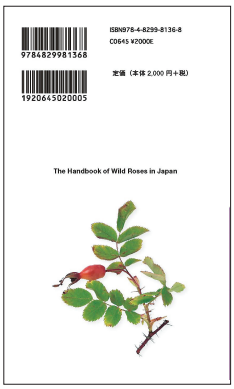
今年の開花シーズンにあわせて出版予定でしたが、遅れてしまいました。４月に入って何回か、原稿が一部足りない状態で校正紙を出してくださり、国際会議で中国へ10日間ほど出かけている間もさらにチェックを続け、５月14日が直しの最終日。残念ながらいくつかあきらめる箇所ができてしまいましたが、表現の不揃いなど、本質的でない誤りは増刷改訂できるようになったらそのときに、ということになりました。

（６）驚きの印刷技術

最後の間違い探しが呆れるほど大変だったので、出版はできても見ると悲しくなるような本にしてしまったらどうしよう、と不安でしたが、大丈夫でした。自分で言うのはおめでたいですが、できたてのハンドブックを神楽坂の文一総合出版で手にしたとき心から、「あぁ、こんな本がほしかった」と思いました。喜ぶ私に社長の斉藤博さんが、さらに嬉しいことを教えてくださいました。「ハンドブックの写真をルーペで見てください」と言うのです。「ＦＭスクリーン」という特殊な印刷方法を用いていて、写真がとても細かく再現されているとのこと。言われるままに本をルーペで見てみたら、肉眼では見えない、実の表面の腺毛が落ちた痕までもが見えて驚きました。バラの花や実をルーペで見ながら、ハンドブックもルーペで見る、そんなようすを想像してしまいました。

佐倉草ぶえの丘バラ園

日本の野生バラを一冊にまとめることで、何がまだわかっていないか、課題がたくさんみつかりました。直すべきところは今後もいろいろ出てくるでしょう。出版後４ヶ月ほどが経ちましたが、このハンドブックを持って野山で野ばら探しをしてくださっている方もあるようです。これからも地道に研究を続け、美しく作っていただいたこの１冊を、さらに完成されたものにしていきたいと思っています。



『野ばらハンドブック』
御巫由紀 解説
大作晃一 写真
新書判 152ページ
文一総合出版
定価2,200円
（本体2,000円＋10％税）
ISBN 978-4-8299-8136-8